

〔研究ノート〕

ワールド・ヒストリーのヒストリーと日本政治史 —グローバル・ヒストリー主流化後の歴史叙述とそれぞれの民主政治(1)

村 井 良 太

はじめに—コロナ禍の中の2度目の在外研究

1. 2つの失敗とワールド・ヒストリーの誕生—「批判的歴史叙述」と場所の声
 - (1) ワールド・ヒストリーとは何か
 - (2) なぜワールド・ヒストリーを学ぶのか（以上、本号）
2. 問題をいかに克服していくか—ワールド・ヒストリーの多様な挑戦（以下、次号予定）
3. グローバル・ヒストリーへの展開と主流化による課題の変化—「批判的歴史叙述」を越えて
4. 日本という立ち位置とワールド・ヒストリー
5. ワールド・ヒストリーと日本政治史の過去と未来
おわりに—反体制学を越えて政治外交検証の学として

はじめに—コロナ禍の中の2度目の在外研究

ゼバスティアン・コンラートは、その著『グローバル・ヒストリー—批判的歴史叙述のために』（小田原琳訳、岩波書店、2021年：原題 *What is Global History?*、2016年刊行）の冒頭で、「すべての歴史家は、今や世界史家なのである。その多くはいまだ意識していないにもかかわらず」とい

うC・A・ベイリが2004年の自著で語った言葉を引き、「グローバル・ヒストリー、ワールド・ヒストリーが現在のところブームであることは間違いないだろう」と述べている⁽¹⁾。

私は2021年10月から2022年3月までの半年間、米国フィラデルフィア市のペンシルバニア大学歴史学科で在外研究を行った。受け入れてくださったのはフレドリック・R・ディキンソン教授である⁽²⁾。ディキンソン先生は近代日本史研究から東アジア外交史、さらにワールド・ヒストリー／グローバル・ヒストリーに展開され、第一次世界大戦が創り出した新しい日本と東アジア、世界を中心に研究を重ねておられる⁽³⁾。滞在中、新型コロナウイルス感染症の再拡大もあって資料調査は思うに任せず、授業やセミナーへの参加が中心となった。また、授業も10月から3月の滞在では、秋学期の途中から加わり、春学期の途中に去るという残念なことであった。

-
- (1) ゼバスティアン・コンラート(小田原琳訳)『グローバル・ヒストリー—批判的歴史叙述のために』(岩波書店、2021年)1頁。
- (2) ペンシルバニア大学歴史学科のホームページ(<https://www.history.upenn.edu/>)。ホームページは2022年11月21日に確認。以下、同じ。また、ディキンソン先生がディレクターを務めていた同大学Center for East Asian Studiesにも大変お世話になった(<https://ceas.sas.upenn.edu/>)。
- (3) ディキンソン先生の単著には、*War and National Reinvention: Japan in the Great War, 1914-1919*. Cambridge: Harvard University Asia Center, 1999、『大正天皇——躍五大洲を雄飛す』(ミネルヴァ書房、2009年)、*World War I and the Triumph of a New Japan, 1919-1930*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013があり、ペンシルバニア大学歴史学科に掲載されているCVによれば、*A Global History of Modern Japan*. Cambridge: Cambridge University Pressの近刊が予定されている。また、本稿と関わりのある日本語での論考として、フレドリック・R・ディキンソン「グローバルな観点からみた戦間期の日米関係—ウッドロー・ウィルソンからモダン・ガールへ」柴山太編『日米関係史研究の最前線』(関西学院大学総合政策学部、2014年)をあげておきたい。そこでは「グローバルな時代においては、日米関係をよりグローバルな観点からみるべきである」と述べられ(同、13頁)、質疑応答記録には「私に言わせると、太平洋戦争というのは新日本を殺そうという戦争であって、アメリカとはほとんど関係ない話ですね」という発言が飛び出している(同、39頁)。この発言は通説的理解に挑戦するもので、刺激的であるとともに、私自身が政党内閣制を主題として日本語の資料を中心に約30年間読みあさってきた理解と全く矛盾せず、その通りだと感じている。

にもかかわらず、ディキンソン先生の授業を受講し、対面やオンラインでセミナーをはじめ、コロナ禍のフィラデルフィアで触れる全てはとても刺激的であった。何度もPCR検査を受けながらの渡航と滞在は、私の期待と希望を完全に満たしてくれた。

授業はいずれもディキンソン先生による2021年秋学期の歴史学科の学部・大学院同名科目 East Asian Diplomacy と2022年春学期の学部科目 Making of the Modern World: Thirteen Keys to Human Happiness、大学院科目 Teaching World History を聴講した。学部科目 The Making of the Modern World は歴史学科の入り口科目で、毎週ディキンソン先生のビデオ授業と、対面での学科教員によるオムニバス講義があり、いずれも大変面白かった。ティーチング・アシスタントによる学部生のクラス分け授業にまでは参加しなかった。

私は日本政治外交史を専攻し、博士(政治学)の学位を受けた。教育は一貫して法学部/法学研究科(政治学)で受け、就職後の職場も法学部(政治学科)である⁽⁴⁾。また、2010年4月から2011年3月まで最初の在外研究をハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所で行ったが、そこは国際的な日本学のメッカであった⁽⁵⁾。日本政治外交史が政治学と歴史学と日本学の重なり合う領域であるとすれば、今回、歴史学科で在外

(4) なお日本では、主たる研究手法が歴史学でありながら、大学院教育を法学研究科政治学専攻で受けている研究者は多いが、歴史学と政治学の距離がもう少し広い米国では一般的ではない(マーク・トラクテンバーグ/村田晃司・中谷直司・山口航訳『国際関係史の技法—歴史研究の組み立て方』ミネルヴァ書房、2022年、xviii)。

(5) ライシャワー日本研究所ホームページ (<https://rijs.fas.harvard.edu/>)。三谷博先生、劉傑先生、楊大慶先生による日中若手歴史研究者会議(笹川平和財団)への参加を契機として、国際シンポジウムを開催されたアンドルー・ゴードン先生に受け入れていただいた。この共同研究の成果は、劉傑・三谷博・楊大慶編『国境を越える歴史認識—日中対話の試み』(東京大学出版会、2006年)にまとめられ、英語版も出版されている(Daqing Yang, Jie Liu, Hiroshi Mitani, and Andrew Gordon, ed., *Toward a History Beyond Borders: Contentious Issues in Sino-Japanese Relations*, Cambridge: the Harvard University Asia Center, 2012)。

研究が出来ることは大変楽しみなことであった。ディキンソン先生は年度によって他に *Modern Japanese History* を開講されており、2011年2月に訪問した際には、その内の1回の授業を見ることができた。

今回、ディキンソン先生の、特に大学院の授業 *Teaching World History* で毎週読んだ教材をもう一度読み直したいという思いもあり、ここでは、フィラデルフィアでの学びを中心に、ワールド・ヒストリー／グローバル・ヒストリーと日本政治史について、これまで考えてきたことをあわせて記録に残しておきたい。それは、あるアメリカ社会から見た現代世界論でもある。

方法としてのワールド・ヒストリー／グローバル・ヒストリーへの関心は、私自身の研究テーマと結びついている。私は新制度論を土台に第一次世界大戦後の日本政党政治に関する史的研究で博士号(政治学)をとり、2冊の本にまとめた⁽⁶⁾。さらにその派生としての市川房枝と、新たな研究としての佐藤栄作で評伝を書いた⁽⁷⁾。現在、関心をもっているのは、佐藤栄作が1970年に設定した経済的大国を目指す新たな日本像が、その後の四半世紀にどう変化し、継続されていったのか、そのマッドル・スルー(泥土を手探りで前進する)のプロセスを明らかにすることである。したがって、1970年から1995年頃を理解するにあたって、ワールド・ヒストリー／グローバル・ヒストリーは有効な道具となるのではないかとまず考えた。端的に1970年代以降はグローバリゼーションの加速した時代だと考えたからである。こうした個人的な研究上の事情もあって本稿の整理は近代、なかでも1920年代以降の視点からとなっている。本来、ワールド・ヒストリー／グローバル・ヒストリーの強みは、近世など、もっと早い時期にも大きく発揮されていることはひとまず指摘に止めておきたい。

(6) 村井良太『政党内閣制の成立 一九一八～二七年』(有斐閣、2005年)、村井良太『政党内閣制の展開と崩壊 一九二七～三六年』(有斐閣、2014年)。

(7) 村井良太『佐藤栄作—戦後日本の政治指導者』(中央公論新社、2019年)、村井良太『市川房枝—後退を阻止して前進』(ミネルヴァ書房、2021年)

物事を理解する上で成り立ちから考えるのはヒストリーの方法である。ここではワールド・ヒストリーのヒストリーを、日本で、日本人が、日本政治外交史を研究・教育しているという観点から素描する。また、本稿でワールド・ヒストリーを特に世界史という言葉と分けて用いるのは、両者を区別して論じることに意味があると考えからである。詳細は後述するが、端的に言えば、日本の文脈で見た場合に、第二次世界大戦の「戦後」が生み出した歴史を見る視点が「世界史」であり、これを継承しつつ「ポスト戦後」を内在化したものが「ワールド・ヒストリー」であり、「ワールド・ヒストリー」はさらに冷戦後を内在化した「グローバル・ヒストリー」と一面で重なり合っている⁽⁸⁾。

本稿の結論を先に示せば以下の通りである。1970年代に始まるワールド・ヒストリーの取り組みから展開したグローバル・ヒストリーは、歴史叙述の正統性において、国家単位の政治史に替わってすでに主流化した。主流化したことで出発点での批判的歴史叙述(ヨーロッパ中心的理解と国民国家中心の語りの二重否定)という自己規定はすでに単純ではなくなっており、新たな段階に入っている。それは日本を対象とする政治史では一層顕著に観取できる。第1に、国家単位の政治史は統治が今なお国家を単位としているという点で重要であり、民主主義社会においてはなおさらである。第2に、学問の潮流には地政学的な磁場があり、日本で国家中心の研究を批判することが逆にヨーロッパ中心的理解の再拡大に寄与しかねないという矛盾に気づかされる。それは資本主義市場、より端的には労働市場の共通性を前提に、アングロフォン(anglophone = 英語使用)によって世界のすべてが理解でき、それ以外のものは読む必要も議論する必要もないという覇権的状況の強化につながりかねず(それぞれの世界は日常生活の中でそれぞれの言葉を話しているにもかかわらず)、日本史への批判的歴史叙述の無批判な輸入は古くて新しい体制的偏見を助長する。以

(8) もとより日本の「世界史」も成長し続けている。詳しくは後述したい。

上の現状理解に立って、国内では二重に古い歴史(国家を単位として政治を扱う)と指摘されることのある日本政治史の未来像を過去を踏まえて考察し、方法論的にワールド・ヒストリーにあえて止まる意義を述べる一方、新たに必要とされる日本政治史がワールド・ヒストリーを内在化したものでなければならないことを主張する。それこそが日本政治史の新地平であると考えている。

1. 2つの失敗とワールド・ヒストリーの誕生 —「批判的歴史叙述」と場所の声

学としてのワールド・ヒストリー／グローバル・ヒストリーは国境を越えた潮流である。その一方で、ある学を受容や生成にはそれぞれの社会の事情、いわば現地性がある。本稿の前段では主としてアメリカの問題としてのワールド・ヒストリー／グローバル・ヒストリーの勃興と展開を論じ、それを受けて後段では、日本の問題としての受容や可能性について論じていく。ヨーロッパやそれ以外の地域は直接対象としないが、ヨーロッパにもヨーロッパの現地性があり、「アイデンティティのより広い網の目」を必要とするヨーロッパ連合が、国家を超えるヨーロッパ単位でのアイデンティティ形成を歴史学に求めた⁽⁹⁾。

(9) リン・ハント(長谷川貴彦訳)『グローバル時代の歴史学』(岩波書店、2016年) 54頁。また、クロスリーは、ワールド・ヒストリーの誕生について、1920年に最初に出版されたH・G・ウェルズの『歴史の概観』を取り上げている(P・K・クロスリー著／佐藤彰一訳『グローバル・ヒストリーとは何か』岩波書店、2012年、1頁)。ウェルズは「世界史はわれわれが慣れ親しんでいる国民史の寄せ集め以上の何かであると同時に、それ以下の何かであるということであり、それは別種の精神をもって取り組まれ、異なるしかたで記述されなければならない」と述べて「概観的で包括的な記述」を推奨した(同、2頁)。ウェルズが「世界史は、直接史料を用いて研究にたずさわる歴史家ではなく、広く一般的に妥当するパターンを探求するために、そうした歴史家の研究成果を精査する歴史家によってなされるものである」という基本理解を持っていたという指摘は興味深い(同、4-5頁)。

(1) ワールド・ヒストリーとは何か

ワールド・ヒストリーとはいかなる歴史学であろうか。1982年、アメリカでワールド・ヒストリー協会 (World History Association=WHA) が設立された。WHAは、教育、研究、出版、個人間の相互作用を奨励することでワールド・ヒストリーを促進するために組織された学者、教員、生徒からなる団体である、と2021年段階で説明されている⁽¹⁰⁾。それは、大学教員と中等教育学校(中学校と高校)教員のグループが新たな歴史学の下位分野が必要であると立ち上げたもので、その使命は、人々の間の理解とグローバルな意識、歴史認識を増進する活動の促進である。

アメリカにおいて、ワールド・ヒストリーは1970年代に勃興したという。国家史や地域史を、より広い異文化間の、比較による、そしてグローバルな方法へと展開していこうと考える研究者や教員によって始められ、先駆者の何人かはヨーロッパやアメリカ以外の地域のエリア・スタディーで訓練を受けていた。1982年のWHA創設後、ニューズレター *World History Bulletin* でのやりとりが始まった。ジャーナル発刊も目指され、1990年、ハワイ大学の Jerry H. Bentley を編集者として実現した。 *Journal of World History* の刊行である。1992年からは年次研究大会も継続的に開催されている。

ではWHAの考えるワールド・ヒストリーとは何か⁽¹¹⁾。すなわち、ワールド・ヒストリーを他のタイプの歴史学と分けるものは何だろうか。ワールド・ヒストリアンは、世界全体を扱う必要はないが、広い空間のレンズを用いる、という。その傾向として、個々の国々や文明を強調する代わりに、地域毎の異なりや、圏域間の結びつき、また移民や征服や貿易を通したヒト・モノ・アイデアの移動などを扱う傾向がある。とはいえ、研究者が扱うテーマは時間軸においても空間軸においても多様である。

(10) World History Association, “About” (2022), <https://www.thewha.org/about/>

(11) World History Association, “What Is World History?” (2022), <https://www.thewha.org/about/what-is-world-history/>

人々は長い間にわたって事実上のワールド・ヒストリーを行ってきた。古代ギリシャのヘロドトス、古代中国の司馬遷の名前があげられ、学者のみならず詩人や修道女、科学者などなど多様な人々が多様に担ってきたという。しかし、19世紀から20世紀にかけて、専門家による歴史—それは大学で訓練された男性によって書かれ、政治的単位として国家の重要性が高まり、ナショナリズムが成長する動きに適合的なもの—に焦点が定まった。しかし、第二次世界大戦後、学者と教員は国家的立場で組織された歴史への挑戦を始めた。アメリカでは、大学でのエリア・スタディーズのプログラムが人々に世界の多くの部分を学ぶよう訓練するようになり、専門的歴史家の中にはより広い範囲の歴史を書くものが出始めた。カレッジや高校でも世界史のコースが作られた。ヨーロッパでは外交史が次第に帝国史や国際関係史などに広がり、1980年代の初めにはアジア、アフリカ、ラテンアメリカの学者達がヨーロッパ志向の世界史や国際関係史をますます批判するようになった。そして1990年代にはトランスナショナル・ヒストリーやディアスポリック・ヒストリーなど、新たな方向性がいくつも現れ、何人かの歴史家は自らの領域をグローバル・ヒストリーと呼ぶようになってきた。こうして、21世紀の「今日、ワールド・ヒストリーは多くの形態と多くの声を持つ」のである。

このようなアメリカでのワールド・ヒストリー誕生の理由と状況は、1990年の *Journal of World History* 創刊号に Bentley が寄せた発刊の辞「グローバル・ヒストリーのための新しいフォーラム」に詳しい⁽¹²⁾。Bentley は専門歴史学の父ランケから論じ始める。19世紀にレオポルト・フォン・ランケらによって近代歴史学が形作られ、歴史は文学の一部から一つの専門性を有する学術として自立した。と同時に19世紀はヨーロッパを中心に国民国家の勃興期であり、新しい学問としての歴史学は同時代性によって国家と結びついた。そのような時代は長く続いた。しかし、Bentley の

(12) Jerry H. Bentley, "A New Forum for Global History," *Journal of World History*, Vol. 1, No. 1, Spring, 1990, pp. iii-v.

述べる過去20～30年ほど、すなわち1960～70年代以降、歴史家が国民共同体に焦点をあてることへの限界が露呈してきた。ワールド・ヒストリーは国民国家の観点からではなく、むしろグローバル・コミュニティの観点から分析される。

以上の議論から、歴史学としてのワールド・ヒストリーにはランケが確立した近代歴史学の批判に根ざした2つの目的から出発している。1つはヨーロッパ中心の歴史叙述の克服であり(ヨーロッパ中心主義的なマスター・ナラティブを掘り崩す)、もう1つは国民国家中心の歴史叙述の克服である(ナショナルな語りから逃れる)。学問としての歴史学は、その本質としてヨーロッパ中心かつ国民国家中心でなければならないわけではなく、近代歴史学の形成期が偶然、国民国家形成期と重なっていたからであったとすれば、歴史学をそのような経路依存から解放することが可能であり、必要である。ワールド・ヒストリーの立ち上げに西洋と非西洋の接点の一つであるハワイを拠点とする研究者があたっていたことは、どこで考えるかという点で重要である。

また、1970年代という時期も興味深い。この時期に、女性史や、文化史、アフリカン・アメリカン史など、多様な批判的歴史叙述の取り組みが時を同じくして開花し始めている。その意味でワールド・ヒストリーもこの時代の子供である。それは学の変化である前に世の中の変化であった。世界的な動きでは1968年に注目が集まるが、この頃には、第二次世界大戦を通して確立したアメリカの覇権、その下で大戦末期に構築された戦後の諸制度、そして延長戦としての冷戦も変容し、敗戦国が復興を果たす中で世界の多極化、さらには資本主義(消費文化)や人権概念の発展など、もはや第二次世界大戦の戦後は終わっていた。「ポスト戦後」という言葉は日本語にすると単に戦後の次の呼び名の決まっていない状態という体だが、「ポスト」という言葉にはそれが終わっているがその影響が続いている状況も含意するのだという。そうであれば、1970年代は正しく「ポスト戦後」期であった。

(2) なぜワールド・ヒストリーを学ぶのか

ワールド・ヒストリーには、こうしたランケ流のヨーロッパ中心的で国民国家中心的な近代歴史学の克服という主題とともに、もう一つの大きなテーマがあった。それが、先の WHA の説明にも現れていた教育への関心である。ワールド・ヒストリーは、大学や在野での研究と、大学や中等教育学校以上での教育が、手を携えながら発展してきた。

1976 年のアメリカ歴史学会 (American Historical Association = AHA) 研究大会では、「西洋文明を超えて」と題するセッションがもたれた⁽¹³⁾。William H. McNeill は危機感を語る。歴史学の専門化が教育に浸透した結果、個別専門的なことが教えられてきたが、そのことでアメリカでの歴史学が、高等教育の周辺へと格下げされかねなくなっている。そこで、学部生全体に教える価値のある何か、彼らの生活に資し、市民としての役割を効果的に果たしうる何かを見つけなければならない。

国家史はこの目的で作られた。アメリカ史はしばしば州の法律によってすべての高校生に教えることになっている。しかし、高校での歴史の授業内容が貧弱であると、彼らは大学に進んで自ら専門を選ぶことができるようになると、歴史学からどんどん離れていく。事実、1960 年代にはすでにその兆候があり、この 10 年間、大学の歴史学者は必修コース教員という特権的地位を明け渡してきた。そして若い同僚が直面する就職危機はますます悪化し、1970 年代に入っても改善の兆しはない。この 20 年間、歴史家は研究と歴史学の新しい形の探索に汲々として、「アメリカ史」もしくは「西洋文明」という名前のいずれかで教えられている 1、2 年生向け入門コースに力を注いでこなかった。これが大きな失敗であった。

四 「西洋文明」コースが 1930 年代と 1940 年代に盛んになってきた時には、人類の過去についての偉大な考えを学び、人々の自由について考えるなど、博士論文の内容を教授されるよりも魅力的な内容であった。しかし、その

(13) William H. McNeill, "Beyond Western Civilization: Rebuilding the Survey," *The History Teacher*, 10-4 (1977): 509-515.

ような出発点は忘れ去られている。私たちは学部生にとって一般的重要性のあるコースを組織しなければならない。McNeill が 15 年前の 1963 年に *The Rise of the West: A History of the Human Community* を刊行した時、学生に彼らが生きる世界を紹介するのに適した枠組みはワールド・ヒストリーであると考えていた。国家の枠組みを超えて真にグローバルな歴史こそが若者に提供されるべきであり、アフリカや中国、ベトナム、それ以外の世界の出来事が市民生活に決定的な重要性を持っている。McNeill は、1950 年 (朝鮮戦争) 以来のアメリカ政府のアジア大陸での不幸な冒険が、前期ビクトリア時代にアフリカを暗黒大陸と見なしたような地域への無知が促進したと疑わない。かつて「西洋文明」コースが果たしたように、今度は世界規模での「ワールド・ヒストリー」コースが求められる。このようなコースを教えることなくしては、大学での歴史学の場所は縮小し続けるだろう。

他の登壇者も諸学の中での歴史学の地位の低下を実感し、危機感を共有していた。Lewis W. Spitz はそれが「リベラル・アーツの衰退」と言われるものの影の部分だという。スタンフォード大学では 3 年前、30 年続いた「西洋文明」コースを解体してルネサンスから現在までの近代ヨーロッパの入門コースを作り、学生がより早期に歴史の魅力に触れられるよう改革した。教育改革は 1 回の出来事ではなく、継続的なプロセスでなければならない。新たに設けた「西洋文化」コースでは、異なった歴史的状況が人々のどのような行動や存在につながるのか、また 1 つの効果的な伝統があるのではなく、似通ったいくつもの伝統があること、伝統と生きることも目の前の固有の経験によって異なってくることなどが含まれる。また、「西洋文明」を教えるある教授は、時代毎に他文化の美術などのスライドを見せている。また、西洋文明を学ぶ上で、東洋文明やラテンアメリカ史やアフリカ史のコースをあわせて履修することを求めるやり方もある。著名な歴史家ロビン・G・コリングウッドが断言したように、歴史を学ぶことの最も大きな目的が、人が自らを知ることであり、西洋文化のコー

スは教育のとても核心的な部分となると考えている。

さらにハーバード大学での歴史教育の変化について語ったのは Giles Constable であった。ハーバード大学には「西洋文明」という名前のコースはなく「ヨーロッパ史」があり、最近には新しい入門コースを考えている。Constable の理解では、いわゆる西洋文明コースは、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間に起こったアメリカの世界での地位の大きな変化に対応したものであった。ヨーロッパの現代までを扱うコースは 1912 年に作られ、すぐに第一次世界大戦に突入した。それは戦後の平和会議にも参加したような教員が教え、スペインとオスマン帝国史研究の草分けとなったような人が担当した。そしてこの科目は、1930 年代半ばのピーク時には 750 人もの学生を集めた。

第二次世界大戦後には歴史学の本質と自由教育 (liberal education = 生活の手段のためではなく個人の教養のための教育) の中での位置づけが問われた。社会科学調査委員会が 1954 年に出した会報 64 は「歴史研究における社会科学」と題され、歴史家による政治学や人類学など他の専門領域での概念や方法への強い関心に注目した。歴史家による他の社会科学の概念等の利用は歴史学の目的の再定義を伴うわけではなかったが、関心の方向性や何ができるかの再検討、手段の再試験をもたらした。このことは 1950 年代と 1960 年代の西洋文明コースに影響したが、より大きな影響は、2 つの大戦による破壊の後で、西洋の伝統の価値や重要性を断言したいという願いによって鼓舞されていたことであった。その端的な声明が 1945 年の「ハーバード赤書」(冊子体のカバーの色からついた名前) に現れていた。そこでは学校で一般的な歴史を扱う場合にヨーロッパに焦点をあてるべきことが奨励されていた。そのころ「歴史 I」の接続科目は「社会科学 I」となりウェーバーや他の社会理論家の仕事が組み込まれた。

それでも 1960 年代半ばまでは「歴史 I」は人気科目とは言えなくても、300 人ぐらいを集める成功を楽しんでいた。しかし、1969 年にはその 3 分の 2 の受講生になり、最終年度となった 1970-1971 年度の授業は 39 人の

学生を集めたに止まった。これらの数字は学生の関心や要求の変化を表していた。「社会科学Ⅰ」はある程度ベトナム戦争の犠牲者であったが、大学内の変化もあってヨーロッパ史コースの回復では済まなかった。1年を通じた大教室講義を学生は好まず、教員にも難しく、それぞれの専門化も進んでいた。そこで1つの入門講義を再建するのではなく、リレー形式の授業を作った。1年間のコースだが、アメリカ史、ラテンアメリカ史、極東史に分割でき、アフリカ史も学べる形にしたのである。

それは今日の知的要請に適い、歴史を学ぶ導入になる。「歴史Ⅰ」は20世紀初頭の伝統を共有するもの、「社会科学Ⅰ」は第二次世界大戦後のアメリカとヨーロッパに共通する伝統と利益を理解するためのもの、そしてその次のコースは、それら2つの授業を越えて、現在、すなわち1976年時点でのグローバルな問題や関心を反映した授業が必要であり、もっぱらヨーロッパを扱うのでもなければアメリカでもなく、他の地域との関係の中で作られる。今日、歴史家だけでなく市井の人々の間でも西洋社会の成功よりも失敗が指摘される中で、非西洋的伝統への理解も強調されるようになった。そして「何が」歴史研究かが問われるだけでなく、従来とは異なる証拠の利用など「どのように」歴史を研究するかも変化している。その上で歴史教員の責任は、歴史的な知識や方法—それは分かっていることとともに分からないことも含め—の広がりを示すことで、過去に存在した人生や社会の多様性や複雑さ、より広い経験へと学生を導くことである。

最後に Frederic L. Cheyette は全体をまとめた総括を行い、「西洋文明」を自由教育ではなく1930年代から1940年代の一般教育 (general education = 専門教育の前段階としての教養教育) 運動の中で理解する。「西洋文明」は単一性を減じている。そして歴史知識の認識論的問題の中で、それは誰の歴史、偉大な白人男性の歴史だろうか、農民や労働者や黒人や女性やユダヤ人、他の忘れられた人々の主張はどう扱われているだろうか。歴史教員が学生に何を入門コースで提供するかを考えるのではなく、学生がそこで何を得るかを考えるべきではないかと述べて、現在と過去との対話を可

能にする控えめな提案に止めている。

討論者である John Anthony Scott は、西洋史の衰退を、国内的な 1950 年代のアメリカでの市民権運動 (白人中心のアメリカ理解への批判) と国際的な冷戦から理解し、Paul H. Tedesco は知識よりも理解や方法が大切であると説いた。また、Richard E. Sullivan は、歴史を研究することと歴史を教えることは全く異なることであると再確認している。

こうしたワールド・ヒストリーの創発からしばらく経ち、21 世紀に入った 2004 年、Bayly は、どのようにワールド・ヒストリーが書かれてきたかを簡潔にまとめている⁽¹⁴⁾。詳しくはここで紹介しないが、20 世紀を通して歴史の専門家はより深い社会史を書こうとして、歴史から外れていた人々、権力をもたない人々、ヨーロッパの外の歴史を描いてきた。ワールド・ヒストリーを書く上での貢献は、政治史、経済史以上に、文化史や社会史、イデオロギー史にあるという。

また、2007 年には、先に *Journal of World History* の創刊の辞を書いた Bentley が、ワールド・ヒストリーの意義を次の 3 点から説明している⁽¹⁵⁾。第 1 に、従来型テーマの歴史研究への貢献である。例えばアメリカの南北戦争はワールド・ヒストリーの視点で検討するとどうなるか。第 2 に、それ以上の貢献として教育への貢献、すなわち、世界とのかかわりを示す教育をあげている。そして第 3 に賢明な判断への貢献がある。政治的賢明さと歴史理解の間には関係が深い。そこには 1977 年の AHA セッションに感じられた切迫感は希薄で、新しい取り組みの 30 年後の少し落ち着いた姿が感じられる。

この分野の牽引者の一人 Craig A. Lockard は 2009 年に最終講義を行った⁽¹⁶⁾。少し詳しく紹介する。彼は自ら勤めるウィスコンシン大学グリー

(14) C. A. Bayly, "Writing World History," *History Today*, 54-2 (2004), pp. 36–40.

(15) Jerry H. Bentley, "Why Study World History?," *World History Connected*, 5-1 (2007).

(16) Craig A. Lockard, "Crossing Borders: Disciplines, Cultures, and Histories," *Middle Ground: An Online Journal for World Historians*, 1-1 (2010).

ンベイ校での1967年の創立以来の学際的で国境横断的な教育の取り組みを紹介し、他の文化を勉強し、ワールド・ヒストリーを学ぶことが、教員と学生にとって、私達の暮らす多文化的で、グローバル化され、急速に変化する世界のより良い理解を提供すると説いた。

彼は言う。それは21世紀を生きるアメリカ人が必要とするものであり、他の社会への誤った理解や無知は、ベトナムやイラクでの戦時を含めアメリカ人が世界で積み重ねてきた多くの外交政策上の大失敗のいくつかに責任を負っている。また今日、アメリカ人が世界への関心をおぼえても持たなくなっても、その行動は2008年のリーマンショックのように、良かれ悪しかれ他のすべての人々に影響する。過去半世紀でアメリカが戦ってきた朝鮮半島、ベトナム、イラク、アフガニスタンを地図で示せないアメリカ人も多い。Lockardの世代、すなわち1960年代と1970年代の若者は、旅行や勉強、仕事で海外に行く機会を持っていた。平和部隊やボランティア団体の仕事、もちろんベトナム人が「アメリカ戦争」と呼ぶ「ベトナム戦争」にも従事した。今でもヨーロッパでヒッチハイクし、日本や中国で英語を教え、メキシコでスペイン語を、パリで芸術を学び、アフリカで環境や健康プロジェクトのボランティアをすることもできる。そして家や教室、近隣社会でも学びうる。

したがって、「歴史家も境界を越えて自らの知的道具を拡張し、地元のことしか考えない視点を克服すべく、自らのぬくぬくとした環境から踏み出すべき」である。外国で教え、学び、働く機会を追求すべきであり、それはアメリカ人の態度や行動が万人に通じるという自民族中心バイアスを越えたより広い視角を与えてくれる。Lockardはロサンゼルス郊外の多文化環境に生まれ、中国美術に関心を持ち、ヨーロッパを旅行し、香港大学に進み、ハワイ大学で修士号を受けた。そしてウィスコンシン大学マディソン校で東南アジア・比較世界史で博士号をとった。他の文化を探索することでアメリカ人は自らの文化を新しい方法で見ることができるようになる。

現在、私達は国境を越えたグローバル村にいると言う。1世紀前には大英帝国には日が沈まないと言われたが、今日ではハンバーガー・レストラン・チェーンのマクドナルドには日が沈まない。この50年間、多くの歴史家がワールド・ヒストリーを理解する価値に自覚的となり、アメリカ史を世界の文脈の中に位置づけるようになった。だが、ワールド・ヒストリーのポイントは、世界を全体として見ることであり、すべての社会とその結びつきを包摂する。高校で学ぶ AP World History 科目も大いに伸びている。

ワールド・ヒストリーの教育・研究分野での直近50年間での伸張は、世界の大きな変化による。1960年代から、米国とヨーロッパの歴史への強調はアメリカの学生の多元的でグローバルな世界での生活の十分な準備となるとは思われなくなり、東アジアやイスラム、コロンブス前のアメリカなどの研究が進んだ。13世紀について言えば、リンカーンやシェイクスピアやコロンブスのような西洋人の名前よりも、チンギスハンの名前が重要である。また近年では、インドネシア、日本、中国、台湾、韓国、インド、ブラジルなどが世界経済で活躍しており、アメリカ人はヨーロッパの国々やロシアを知るようにそれらの国々を知る必要がある。

ワールド・ヒストリーを理解することはどのように学生の未来の準備とすることができるだろう。「歴史は正確に繰り返すことはないかもしれないが、マーク・トウェインが書き留めたように、韻を踏む」。Lockard が教え始めた1969年、米国は、不人気で勝てそうもない戦争に行き詰まり、経済には勢いがなくなり、社会は深く分断されていた。2009年の今とてもよく似ているように見えるが、学生はもっと反対の声を上げていた。現代世界は大きな多様性の中のグローバルな一体になってきている。私たちは未だにアメリカ人であり、マレーシア人であり、エクアドル人だが、同時にグローバル村の市民でもある。グローバリゼーションは国際的な結びつきを助長し、フェイスブックですら今では米国の中よりも外に多くの会員を持っている。「グローバルに考え、ローカルに行動する」という格言には意味がある。

アメリカの経済思想家ロバート・ハイルブローナーは1974年の本の中で、「人類に希望はあるか」と問うた。彼は人口爆発や環境の悪化、資源の枯渇、軍事化、時に貧しい国々の自暴自棄にも直面する近代産業社会や民主主義国の永続性を疑った。35年後の現在ではこれに環境変動や十分な食糧を得られない多くの人々の問題が加わっている。長い歴史をたどれば、戦争や乱開発の進展などますます未来に絶望させるものがある。

しかし、人類は第二次世界大戦後に多くの希望へのグリーン・ショット、すなわち景気回復の動きを生み出してきた。紛争の種であった西ヨーロッパは急速に統合され、ほとんどの先進国(米国以外の)は国民皆保険制度を持つ。60年前にフランスとドイツが今日のような同盟関係にあることが想像できただろうか。東欧とロシアでもドグマ的で抑圧的な共産体制が転覆するなんて。そして長い冷戦が終わるなんて。核シェルターや避難訓練に彩られた1950年代に育った者にとって、冷戦の終焉は真に歓迎されることであった。さらに多くの国々で女性のリーダーが選ばれ、東アジアの国々で生活水準が大きく向上し、南アフリカは黒人がリーダーとなり、世界中で人権団体が活動し、様々な国々でNGOが環境問題などに取り組んでいる。歴史は残酷であるだけでなく勇気を与える。Lockardは言う。現代世界は複雑で簡単ではないが、ワールド・ヒストリーが提示する様々な社会は、学生に未来を指し示す見取り図を与えるだろう、と。

こうして、ワールド・ヒストリーは2つの失敗に促されて発展してきた。すなわち、第一次世界大戦によってアメリカが世界的な大国となりながら、自らその責任を果たすことなく第二次世界大戦を迎えた。勝利したがその破壊はすさまじかった。さらに、第二次世界大戦の延長戦として冷戦が始まると、アメリカは従来の伝統を越えて世界中に軍隊を展開し、朝鮮戦争、ベトナム戦争を始め従来関心の低かった地域の戦争を主導し、足を取られることになる。ベトナム戦争を中心に、それは民的に運営されているアメリカ政治の失敗と見なされた。

こうした現実政治上の変化と失敗は、歴史学の取り組みと連動していた。

歴史学の専門化が進む一方、初学者向けの総合教育が必要となっていた。そして第一次世界大戦後には関心の世界への広がりを受けて「西洋文明」コースが人類を扱う課題に答え、第二次世界大戦に向かう 1930 年代半ばにはその受講生がピークとなる活況を呈した。ハーバード大学で教会に刻まれた戦没学生の名前を見たことを思えば、彼らの中には外国を踏み、そして帰らなかった者も多かっただろう。ところが第二次世界大戦後には再び歴史学は揺らいだ。社会科学が輝いて見えたことももとよりだが、次第に「西洋文明」の受講生が減り、アメリカ国内での社会のうねりとベトナム戦争でその流れは決定的になった。社会でも西洋の伝統が必ずしも問題解決につながらないと感じられた。入門コースの受講生がほぼいなくなってしまうというのは、社会がその学問を求めなくなることを意味し、専門家の再生産にも責任を負う大学の歴史学にとって、深刻な失敗であった。

歴史は人々の人生にとって意味がある、と歴史に携わっている者は考えている。歴史は政府の政策と人々の生活を支える。「西洋文明」コースに期待された研究・教育両面での要請に応えるべく、西洋文明の枠に染まりきらない場所が貢献する形で「ワールド・ヒストリー」が発せし、2010 年前後には 1 つの安定を見ていたのである。

(以下、次号を予定)

※本稿はフレドリック・R・ディキンソン先生の講義の個人的な受講録のようなもので、参考文献の多くも授業で提供されたものである(日本語文献も含め参考文献一覧は完結時に掲げる)。もとより解釈上の問題や誤解・誤読があれば、その責任の一切は著者にある。本稿は令和 3 年度駒澤大学在外研究の成果の一部である。送り出してくれた家族、駒澤大学、ディキンソン先生とそのご家族を含め受け入れてくれたペンシルバニア大学とフィラデルフィアの人々に深く感謝する。